
神楽家三人兄弟。

蓮華永

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神楽家三人兄弟。

【Nコード】

N83330

【作者名】

蓮華永

【あらすじ】

神楽家の長男であるはずの白夜は何時も弟達に下僕扱い。父と母はもう、そんな白夜に呆れているし！！

そんな三人兄弟が織り成す、楽しい楽しい日常コメディ。

「一番弱い長男日記」の続編！！

1話

初めまして。俺の名前は神楽白夜かぐらびやくやです。タイトル通りの三人兄弟で、俺は長男です。

知っていますか、皆さん。幾ら長男でも、威厳いげんが有るというわけでもないんですよ。以前、此の作者が投稿した、「一番弱い長男日記」を読めばわかるんですが、俺が一番上ですが、一番弱いんです。家族の中で一番強いのは、父の勺夜じやくや、次が母の緑蘭りょくらん、その次が次男の赤夜せきや、で次が三男の黒夜くろや。俺が一番弱いんですよ。

「おい、馬鹿弱白夜！！ お茶持ってこい！ お茶あー！！」

「お前は何処そのやーさんかー！！」

「口応えすんなあ！ 俺に勝ってからにしろおー！！」

「お前それ、無理って知ってるよなあー！！？」

とこんな感じに弟に下に見られてます。本気で泣きそう・・・。

1 話（後書き）

はい、短編に投稿したものの、続編です。

友人が連載しろ、と五月蠅いので・・・。

私も気に入っているので、これからよろしくお願いします。

2 話

「兄さん。ココアを飲むだけで、何でこんなにもキツチンが汚れるのかなあ・・・？」

「うぐぐぐぐぐぐ御免さないいいいいいいいいい
ヤバいです。我が弟、赤夜がモノすつごく怖いです。・・・顔が
頼むから許してええええ!!」

俺は必死に命乞いをする。こうしなければ完全に赤夜に消されるからだ。

「まったく・・・とりあえず許す。ココアは僕が作るよ。其処でおとなしく、『おとなしく』してるんだよ・・・!」

赤夜サマ、今おとなしくを二回言いましたよね？ 絶対……。

ガッシャーン!!!

俺は今、盛大に転びました。ついでに今の音は皿が割れた音です。ヤバい。後ろを振り返ることが出来ない。だって、赤夜がさつきよりも殺気を出しているから！！怖い！我が弟ながら物凄く怖いです！！

「兄さん……。今からすぐに部屋に戻って、勉強をしない。僕がいいよ、と言つまで、絶対ッッッ対に部屋から出ないで……！」

「はいはいはいはいはいはい！！」

俺はダツシュで部屋に戻った。

ズベー……！

盛大に転んで、顔をすってしまいました。ですが、今は痛みにかまっている時間などないのだ！　今すぐ立ち去らなければ、俺は死ぬ！！

「二回も転んだよ……。大丈夫かなあ？」

何時も、んなな風に怖がられてるけど、本当は僕は兄さんの事が大切なんだよ？きつと兄さんは僕が兄さんの事が嫌いだと思っているんだろっけど、 たった一人の兄をどうやったら、嫌いになれるんだろっね。

僕には、兄さんも黑夜も居ないときつと壊れてしまっただろっね・・。

兄さんは僕が大切にしていることを知らない。

教えるつもりはないけどね、あんな馬鹿に・・。

2話（後書き）

赤夜は兄思いなんですけど、それを表に出さないんですよ。

まあ、一言で言ってしまうなら、捻くれた愛情を兄に向けているんですよ。

意地っ張りなんですよ。

3話

俺の兄は赤夜兄だけです。え？ 白夜？ そりゃあ、もちろんあいつは「下僕」ですよ。

「黒夜！それは激しく酷いと思うんだ！！？」

「お前、勝手に人の脳内みてじゃねえよ！！ 殺すぞ！」

「お前なんか・・・！ ひい！ 済みません！ 御免さない！ だ
から、許してえ！！」

「黒夜、余り兄さんを虐めないの。兄さんが……」

[illegible]

「あ、御免。えっと、兄さんが……」

[illegible]

「御免。僕にはこの言葉は重過ぎた……」

「**どんだけ重要な言葉なの！？**」

「ねえ、貴方……。私、余りにも白夜が可哀想に思えてきたわ。」

「そうか？」

「貴方に言った私が馬鹿だったわ・・・」

3話（後書き）

家族全員出してみましたあ。

楽しいです。

なんだかんだ言って、一番酷いのは父。

4 話

可愛い息子。

よく言っわよね。可愛い子には旅をさせよって。

「だからって俺をこき使うの止めてくんない!? 母上様!」

「え? 厭よ?」

即答されました。悲しい事かな・・・。

「だあってえ・・・、貴方が馬鹿みたいにてんてこ舞いしてるのが
凄く可愛いんだもの!」

「褒めてないよねえ!? 貶してるよねええ!!!? 馬鹿にしてる
よねえ!!!」?

「そんな事・・・」

「其処で黙らないでよ!」せめてお世辞と
か、嘘でもいいから何か言ってえ!」

「御免なさい!! 私は嘘がつけないの!! 御免さない、白夜!
!」

「お願いだから嘘をついて!」

「こらこら。兄さん、母さんを苛めちゃ駄目だよ・・・」

「そうだぞ。白夜のくせに・・・!」

「赤夜はいいけど、黒夜はとことん酷いよなあ!!」?

「事実を述べただけだ!」

「それは宣言しないでえ!」

本当に此の子を虐めていると楽しいわ!!

「母さん・・・」

そんな緑蘭を勺夜は溜息をついた。
ついでに、白夜の弱さに呆れながらも・・・。

4話（後書き）

母さんは虐待じゃなくて、愛なのですよ！
あれが愛だと自分は生きていけません。．．．。

5話

我が息子ながら・・・。

可哀想だなと思う。

白夜は髪が長い。

理由。母さんに一番似ているから。ついでに母さんが娘がほしかったから。

こういうのは普通、次男とか三男とかが犠牲になりそうなんだが、一番顔が似ていて、女顔の白夜が犠牲になった。

中学の時は、自分の父親の権力で教師達を黙らせた。
権力を行使してんだよな、緑蘭は・・・。

「ぱぱー。御本読んでー」

「白夜。いいぞ、読んでやる」

「わーい!!」

白夜、可愛いとは思ふ。「読んでー」とお願いする、姿は可愛い。
黒夜の下敷きになっていなければ・・・。

というか白夜。何故お前は黒夜の下敷きになりながら、笑顔でお願いをする。

そして、赤夜も乗ろうとするなよ。

「グヘエ!!」

白夜「ー!!」

「二人共どいてあげなさい」

「「はーい」「」

ああ、白夜が咳き込んでる。そりゃつらいだろうなあ。

「大丈夫か？ 白夜・・・」

「大丈夫に見えたら眼科行ってきて・・・ぱぱ・・・・・・・・」

「そうだな」

5 話（後書き）

白夜って・・。
勾夜って・・。

6話（前書き）

本日は皆でお買い物に行った時のお話。

店員さん視点。

6話

ぱつと見の印象。

可愛い女の子。

「せきやあー、くろやあー、ぱぱー、ままー。何処ー？」

白とピンクのロリータにピンクのリボンのカチューシャを付けた、女の子が泣きながら、てこてこと歩いていった。そして、次の瞬間、転んだ。大丈夫かな？ 何か、唸ってる……。

「どうしたの？ 迷子？」

「うん……。ままだと離れた……」

きゅん！

可愛いです。物凄く可愛いです。このままお持ち……。は！

待て、自分！ 此処まで来て犯罪を起こそうとするんじゃない！！

「迷子センターは三階……。それまで探しながら私と行こうか？」

「うん！」

きゅん！！

何此の子！？ 本気で可愛い！

「お名前は？ なんて言うの？」

「びゃくやー」

「へえ……」

正直言つて、男の子っぽいなと思った。まあ、可愛いからいかな。

「ままー、ぱぱー。せきやー、くろやー。何処ー？」

後二人の名前が不可解。

「せきや君とくろや君はびやくやちゃんのお兄ちゃん？」

「うっん。弟」

「弟かあ．．．．．。そう言えば此の子幾つ何だろう．．．？　そつかあ．．．」

「ねえ、びやくちゃん。今幾つ？」

「え？ 七歳」

「そう」

にしては、小さい気が……。まあ、女の子だし、いいかな？

「其の服可愛いね」

「うん。ママの手作りー！」

母 淒お！？

何！ 此の子母手先器用にも程があるでしょ！！？ 何！？ デザイナーか何か！？

「お母さん、凄いいえー」

「うん。僕の自慢なの！」

・ ・ ・ ・ ・ うん？
今僕って言った？
いや、でも聞き間違いかも知らないし ・ ・ ・ 。

「あ！居た！！」

「せきやあー!!」

「もう、勝手に居なくなったりしないよね……。心配したんだよ……。」

「ちんたらしてんじゃねえよ、此のくそ馬鹿兄貴——！」

「げふう!!」

ちよ、今見事に此の子の蹴りがびやくやちゃんにヒットしたんだけど！？

「済みません。うちの子供が迷惑をおかけしたようで……」

「済みません……」

「あつたな」

「懐かしいわねえ・・・」

「懐かしいな」

6 話（後書き）

白夜はあほな子です。
迷子になってました。

それで一時期、外に出るのを禁止させられたり・・・。

7話

「なあ、神楽ー。此の写真の女の人誰だよー？」

「へ？」

見てみたら、友人が僕の携帯を弄って、勝手に写真を見ていた。

（何時殺そう……。）

それは、置いとして、多分今、あいつらが見ているのは……、兄さんの写真だろ。

やっぱり。案の定兄さんのだ。

「ああ……。それは……」

待てよ。此处で黙って、会わしてあげて、あいつらが絶望する所を見るというのも、楽しいかも……。

僕はそう思っ、悪辣に自分でも悪いと思う程の笑みをした。

「会わせてあげよつか………?」

「マジで!?!」

「うん。僕の家族だから……」

「「やったー!」!」

馬鹿な奴ら……!!

「ただいまー!。ちよつと此处で待つて……」

「「判った」」

友人達はちゃんと返事をした。

「兄さん……。ちよつと、頼みがあるんだけど……。いい?」

「ん？ 何だ？ 別にいいが……」

「じゃ、来て……」

兄さんはこういう時便利だなと思う。本当に……。

「はい。お待たせー」

「「おお!!」」

友人達は黄色い声を上げた。男があげると気色悪いな。

「初めまして。赤夜のお友達？」

「「ハイ!!」」

「そっか。何時も弟がお世話になってます。俺は赤夜の「兄」の白夜です。よろしくね？」

「「……………。へ？兄…………？」」

「うん？ そうだけど…………？」

ざまーみやがれ。此の愚民共が……!! 僕の兄さんに手を出せるもんなら出してみろ…………!!

「「……………。騙しやがったなー!!」」

「騙すも何も、僕は兄さんが「女」だとも言っていないし、「男」だとも言っていないよ？ そっちが勝手に勘違いしてただけじゃないか…………」

「「ウゲ…………!!」」

ほら、図星。今更気がついたのかな？ 僕が肯定も否定もしていないと…………。

本ツツツツ当に馬鹿な奴ら…………。

7 話（後書き）

赤夜が黒い……。
怖い、其処を抜けば、ただのブラコン……。。

8話（前書き）

三人のテストのお話。

母視点。

8話

此の前、定期テストがあったはずだから、三人共テスト持って帰ってくるわよね・・・。

「「ただいまー」」

「あら？ 御帰りなさい」

「母さんハイ、テスト」

「母さん俺のも」

「はい」

赤夜と黒夜は素直にテストを出してきた。よしよし、二人共90点以上ね・・・。

「で？ 白夜は・・・？ テスト・・・、お出しなさい・・・」
私はニツコリと笑った。白夜は「ひいひい！」と言って、渋々と言っただていでテストを出してくれた。

「平均で45点・・・。何時も通りね・・・。」

「うう・・・」

「流石兄さん、馬鹿だね」

「うう・・・」

「馬鹿白夜」

「ううう・・・」

「「ハア」・・・」

「うわああああん！！」

ああ、何時も通り此の子を虐めるのは楽しいわ！！

8 話（後書き）

母さー－－－－ん!!

。まあ、白夜を虐めているのは、他でもない作者である私ですが・・・

9 話（前書き）

今日は白夜の授業参観。
白夜視点。

9 話

大丈夫。今日の授業参観は母さんにしか教えていない！ だからあの二人が来ることは絶対に無い！ とりあえず落ち着け俺！

今日は授業参観。授業参観の思い出と言えば、何故か俺の授業参観の日は絶対赤夜と黒夜が来ていた。だから、今回は母さんしか居ないときにプリントを見せて、すぐさま捨てた。なのであの二人は来ない。……、多分……、……。

「なな、神楽！ お前の母さん来るんだろ！？」

「？ うん。父さん仕事忙しいから母さんが来るけど……。それがどうしたのさ？」

「いや、ほらお前の母さんものすつげえ美人じゃん！ だから見たいなあと思つてよ……」

「ふーん」

確かに母さんは美人だ。だが、怖い、怖い。物凄く怖い。美人ほど恐いものは無い。だって、赤夜も母さんと父さんを足して割つたような、綺麗な顔してるし、黒夜は父さん譲りだし。だから、綺麗な顔の人程恐い人は居ない。

何故だ……。何故此処にあの二人が居る。しかもクラスの女子達は何か黄色い声あげているし。俺はちよつと後ろを見ると赤夜が気づいたようにニッコリ笑った。後ろからオーラが……。！ 物凄くどす黒いオーラが出ている！！ 怖い！

「神楽。此処の公式言ってみろ」

「ほへ！??」

ちよ、先生何指名しちゃってんですか！！ しかも俺の苦手な数学でよりによってあの二人が居る時に当てなくていいじゃないです

か！　どうしよう。此処は素直に言った方が、多分変に怒られないぞ。

「す・・・、済みません。判りません・・・」

さて、言ったのはいいが、後ろのオーラがさつきより三倍増しに怖くなっているんですが。どうしよう、もう後ろ向けない。こういう時一番怖いのがて赤夜なんだよぉ！！　だから授業参観にいい思い出がないんだよー！　何で俺等違う学校何だろ・・・。と言っても俺だけが公立何だよな・・・。

「よし、神楽。さつきよりも簡単だ言ってみる」

教師が生徒を苛めていいのかー！！！！　何なんだ！　何で授業始まってすぐに俺ばつか当てんのあの人！　何考えてんの！？　ハッ！　もしかして母さんが先生を脅したとか・・・？　どうしよう、物凄く当てはまるんだけど・・・。母さんならやりかねないでしょう。此処でまた判りませんと言ったら、きつともつと怖くなる。後ろが！　仕方ない！　此処は意を決して言うしかない！　「済みません。判りません！」

ヒイヒイヒイヒイヒイヒイ！　う・・・、後ろが・・・、オーラがさつきの六倍増し怖くなった！　本気で後ろ振り向けない！！！！！！　絶対赤夜笑ってるうううううう！　怖い！！！！！！

「白夜、あれぐらいちゃんと判らなきゃ駄目でしょう。もう」

「それより母上様。何故、赤夜サマと黒夜サマまで授業参観に来ていたんですか・・・？」

「二人共創立記念日でお休みだったのよ」

「そうでは無く。俺はプリントを母上様に見せた後速攻で捨てたのですが・・・」

「ああ、私が教えたのよ。二人共今日はずっと暇だって言うし、せ

つかくだし行く？　って聞いたら、二人共悪辣に笑って行きたいと言ったわ」

「母上えーーーーー！！」

追記。

赤夜が怒っていた本当の理由は白夜が言えないと言った時周りの奴らが笑っていたからだ。まあ、それを白夜が知る由もなければ、知る必要もない。

9 話（後書き）

本日は結構長かった・・・。
でも、書いていて楽しかったです。

10話（前書き）

友人に頼まれてまして・・・。
リクエスト更新。

他にもこんな風に書いてほしい、こんなのを書いてほしいというものがあればリクエストお願いします。

10話

「兄さん。悪いけどお使い頼んでいい？」

久方ぶりに赤夜が頼みごとをしてきました。

「別にいいよ？ 暇だったし・・・」

そう言っただけだと赤夜は淡く微笑んだ。

「有難う。じゃ、此れ頼むね」

「ん、じゃ行ってくる」

「よろしくー」

それにしても久しぶりに買い物行くなあ・・・。行くとしたら何時も母さんの荷物持ちだったし・・・。確か今日チラシ見た限りだと、肉が安かった。多分赤夜の事だし、肉巻き野菜を作るに違いない。あれ旨いんだよなあ・・・。流石赤夜、母さんより料理が上手なだけある。多分此れ言ったら殺されるよなあ俺・・・。

ふはっ！ やっぱメモに書いてあったよ、肉！ 予想通り。流石赤夜サマ！！ さ、買おう。で、次は・・・、あれ？ もしかして今日はジャガイモ巻くのかな？ あ、でも旨そう・・・。早く食べてー。

よし、買い物完了！ さっさと帰ろう。腹が減ってきた。

俺は歩きだしたと同時に人にぶつかる。

「あ！ す、済みません！！」

「ああ！？ と、何だ結構可愛いじゃねえか・・・」

男は何か呟いたみたいだけど、それは聞こえなかった。

「ねね、俺達と一緒にお茶しないー？」

「其処にちょうど喫茶店あるしさ。ね、行こうよ？」

「へ？ へ？ あ、あの・・・えと・・・」

ヤバい。不審者だ。しかも質悪そうだな・・・。どうしよう遅れたら赤夜に怒られる・・・！ 早く帰らないと・・・。

「す、済みません！ あ、あの離してくれませんか？ 早く帰らないといけないので・・・！」

男二人は肩に手を置いてきた。やばい、気持ち悪い。

「そんなこと言わずにさ。其処でちよつとお話するだけでいいからさあ・・・」

「なあ・・・」

「や、止めて下さい・・・！」

「ねえ？ 其処までにしてくんないかなあ・・・。いい加減殺すよ？」

「「！！？」」

「赤夜！？」

ヤバい。怒られる。軽く殺人予告したよ、赤夜サマ・・・。本気で怒ってるしい！ 赤夜は俺の傍に来ると男の手を払い落した。

「其の汚い手で馴れ馴れしく触んでくれる・・・？ 穢れる・・・」

赤夜、お前自分から触ったのにその言い草は余りにも酷いぞ。まあ、殺されたくないのと言いませんが。

「悪いけど、先帰ってて。ね？ お願い」

「う・・・、うん・・・」

俺は赤夜が珍しく懇願してきたので帰った。

その後、何があったのかは知らない。ただ、赤夜に頬に返り血みたいな赤黒いものがついていたが気にしない。俺は気にしない。

帰りが遅かった、だから心配になっ行ってみた。そしたら、兄さんが汚い男どもに絡まれていた。兄さんの肩に置かれていた手を見て、完全に切れた。頭の中で何かがキレる音がしたのを自覚したから。兄さんは自分が遅くなったから怒っているんだと勘違いしているようだけど、それならそのままでもいい。知らなくていい。

もちろん兄さんを帰した後は、僕の兄さんに手を出したわけだから、それなりの報復を受けてもらったよ。

ああ、面白かった。

10話（後書き）

赤夜のブラコン話でもあるよね、此れ・・・。
赤夜のブラコンっぷりには作者である私も驚きます。

11話（前書き）

皆で御買物。

白夜、赤夜、黒夜の三人。

此の三人で行ったらどうなるんだろう・・・。

11話

今日は母さん達が2泊3日の旅行に行っているため、俺達だけで3日間やりくりすることに。まあ、主に赤夜がやるんだけど……。二人の方が学校終わるのが早いので迎えに来る。三人でこの後買い物に行く。

「兄さん、遅いよ？ 待ちくたびれた」

「遅いぞ、白夜」

「御免二人共……」

俺が校門に行くともう二人が居た。俺は途中で走ったので少し息を切らしながら謝った。

「じゃ、行こうか」

「行くぞ白夜」

赤夜は笑って、黒夜は仏頂面で俺は微笑んだ。俺は単に嬉しかった。こうやって三人そろって出掛けれるのが……。ただ、ただ嬉しかった。

「ねえねえ、神楽君！ 其の人達御兄さん！？ かつこいいね！」

「え……」

「……」

後ろから声をかけられたので、振り返ったらそんな事を言われた。俺はもう聞きなれたものだと思っていたけど、こうやって久しぶりに言われるとつらいかも……。

「兄じゃないよ。此の子たちは俺の弟」

「え！？ そうなのー！ 全然似てないし、弟さんたちの方が格好いいねえ……」

ズキッ……。

あ……、やっぱりつらいや……。あんまり言わないでほしいなあ……。また、赤夜達に馬鹿にされそう……。

「あのう、よかったら是から御茶でも行きませんか？　すぐ近くにあるんでえ……」

「御免ね？　僕君みたいな女の子、大ツツツツ嫌い」

「え……？」

「俺も嫌いだ。幾ら馬鹿兄貴だけど其処まで馬鹿にされるのは気に食わねえ」

「……赤夜……？　黒夜……？」

「行く（よ・ぞ）。兄さん」

「……！！」

黒夜が久しぶり……。と言うか初めて『兄さん』と呼んでくれた……。俺は嬉しくなって笑った。赤夜が淡く微笑んで、黒夜は恥ずかしかったのか頬を少し赤くしている。

「あり……。がとう……。二人共……」

俺がそう言うと二人は完全に笑って、振り向いてくれた。

楽しい、嬉しい、三人で居られることが、二人が居てくれることが俺にとっての幸せだ……。

11話（後書き）

少しシリアスですが、兄弟愛？が確かめられる話です。
多分次の話と続くかもしれません。
其の時はよろしくお願いします。

12話（前書き）

御買物編2。

12話

「ハイ。兄さんは卵持ってきて。絶対に転ばないですよ？ 絶対だよ」

「判った。行ってくる」

「黒夜は此のメモ通りの物をそろえてきて」

「判った」

赤夜兄はてきぱきと指示を出して、俺たちに持ってきてほしいものを言う。これ本当に買い物か？ まあ、それは置いておいて、とりあえず、今日は久しぶりに三人で買い物。なんか地味に嬉しかったりする。

「赤夜兄、此れ全部持ってきた」

「あ、有難う黒夜。．．．．．兄さん大丈夫かな．．．？」

「．．．．．鈍臭いからな．．．．．」

「赤夜！、黒夜！。持ってきて来たよ！。割らずに！」

「！！！！？」

「本当に！！？ 割ってないの本当にッ！！？」

「マジかよ！ 明日槍降ってくるぞ！！」

「二人共、大袈裟だよ．．．．．」

「其れ程の奇跡（なの．なんだよ）！！」

「．．．．．さいですか．．．．．」

俺と赤夜兄は本気で吃驚した。運動能力皆無の白夜が卵を割らずに持ってきた。しかも転んだ様子は無い。何と言つ奇跡だ．．．！

「はい、今すぐ使わない食材は冷蔵庫の中に仕舞って。何でもかんでも仕舞うんじゃないよ。判ってる？ 兄さん」

「それぐらい判ってる．．．。それぐらい出来る．．．」

「ほら、お前がちゃんたらしてるうちにもう仕舞ったぞ」

「黒夜早っ！！？」

「俺はお前と違って出来た人間だからな。是位簡単だ」
これくらい

「さいですか……」

白夜はズーンと頂垂れ、ソファに移動し、体育座りし、丸くなった。……餓鬼かあいつは……。

「さて、黒夜有難う。テレビでも見てて。出来たら呼ぶし」

「うん、判った」

俺は言われた通りにテレビを見始めた。白夜はそれに気付いたのか一緒に見始めた。俺は白夜の横顔をジッと見た後、手を伸ばし……。

「うぎゅっ!? にゃ、にゃにしゃ。くりよや……」

「いや、何となく……」

白夜の頬を引っ張った。案外柔らかかった。むにむにしてる。こいつホントに男か?

「お前は母さん譲りの女顔だしなあ……。赤夜兄は母さんと父さんを足して割った感じだし、俺は父さん譲りだし……」

「にゃにをいいいたひによ……」

「何言ってつか判んねえ」

俺は悪辣に笑いながら縦、縦、横、横、丸かいてちゃん、をやり続けた。結構楽しい。

「いひゃいよ、くりよや。いひゃいつて。ちょ、あきややたしゆけて!!」

「いいなー、黒夜。僕もやりたい」

「!!!? あきやや!?!」

「後で赤夜兄もやれば? 結構楽しいよ……」

是は結構なお勧めだ。しかし、家族以外の奴らに教えるつもりは無いが。強いて教えていいのは歳の近い親戚ぐらいだな。

12話（後書き）

今日は黒夜。

明日に続きます。

明日は赤夜視点！

多分です……。

13話（前書き）

昨日は学校を休み、PCが使えない状態で更新出来ませんでした。
済みません。

では、本日は御買物編終了。
赤夜視点。

13話

久しぶりに三人で買い物をした。物凄く、楽しかった。何よりも、兄さんが転ばずに、卵をしかもついでに割らずに持ってきたのが奇跡。きつと母さんと父さんに言ったら、泣いて兄さんの頭を撫でる。絶対に撫でるよ、あの二人。

「兄さん、風呂上がったよ。入ってきな」

「あ、はい」

兄さんは子供みたいにててつ、と走って、滑って転んだ。うん、微笑ましいね！！

「うう……、痛い……」

「ププツ……、兄さん……、だい、じょ……うぶ……」

「笑いながら言うな！！」

「いや、だって……！ ププツ……！」

「もう、いい！」

ああ、拗ねかたも子供っぽいや……！ ホント、可愛い兄だな……。小さいころから、近づく男（兄さんを女だと勘違いして）、女は徹底的に排除してきたんだよねえ……。

「赤夜兄い、皿洗い終わったよ」

「あ、有難う。御免ね？ 任せちゃって……」

「いって、たまには頼ってよ。ね？」

「うん」

ああ、本当に黒夜は素直だなあ……。そういやあ、黒夜に近づく女共も排除してきたっけ？ ま、いいや。

「ん……。はあ……。なんか何時もの倍疲れた気が……」

「気の所為だね。」

13話（後書き）

赤夜はもうただのブラコン。

一番恐ろしいブラコン。

当初の予定ではこんなブラコンではなかった。

14話

「赤夜、悪いけど、今すぐ彼女を作ってくれないかしら……」

「

人が起きてきて一番最初にかける言葉だっけそれ？ 否、物凄く違うよね！？

「赤夜、頼む」

父さんまで……。なんか、あったのか？ 二人共深刻な顔してるし……。

「何があったの？ いきなりそんなこと言ってくるなんて……」

僕は恐る恐る聞いてみた。すると返ってきた答えは……。

「ただ、娘が欲しいだけ（だ・よ）……」

「ふざけるな！！」

何考えてんだよ、此の二人は……！！

事の発端は、母さんの姉、白蘭びらんさんの何気ない自慢だった。

『実は、娘がもう一人出来たのよ！ まあ、うちの息子のお嫁さんなんだけど、それが凄く可愛くて……！』

白蘭さん……！

「母さんが懇願こんがんするのはまだ、判るけど、何で父さんまで懇願してくるの？」

「ああ・・・、それはだな・・・。」

父さんは一呼吸置いてから言った。

「もう、本当に白夜が気の毒過ぎて・・・。。何と言うか我が息子ながら、可愛いとは思う。だが、これ以上はちよつと・・・。」

「納得いたしました。それは僕も同感です」

どしよう、物凄く父さんの気持ちが判る。だけど、僕も兄さんが可愛い恰好してるのは結構好きなんだよなあ・・・。。困惑している姿が何とも言えない・・・。。まあ、今はそれは置いて。

「だからって、何で僕なの？」

「だって、貴方、白夜と黒夜の近づく者は片っ端から排除してきたじゃない。だったら、貴方が一番いいのよ」

そうだけどさあ・・・。。だからって何で僕？ まあ、確かに二人に彼女が出来たら、陰から攻撃して告げ口も出来ない様にして、精神的に弱らせて別れさせるけどさあ・・・。。

「厭だよ。もし、僕に彼女が出来たとして、其の人が二人に惚れたら厭だもん。絶対に作らない。二人にも僕の目の届くうちは絶対に作せない」

「（なんとという、ブラコンツぶり・・・！ 恐ろしい！！）」

そうだよ、僕が作って其の人が二人のうちどちらかを好きになっちゃったら、意味が無い。だから、僕が絶対に作せない。

「・・・。。そうだわ！ 取り敢えず二人に、彼女欲しいか聞いてみようかしら！？ と言うかそうした方がいいわ！」

「・・・。。。。。。。。。。。。。。。。。。。。。」

「い、行くわよ！ あなた」

「ああ・・・。。赤夜が怖いんだが・・・。。。」

「しょうがないことよ．．．．．」

結果。

「え？ 彼女？ 要らない」

「彼女なんか要らない」

母さんは泣いた。息子たちの余りにも薄情さに．．．．．。
父さんは黙った。余りにも母さんが哀れ過ぎて．．．．．。

14話（後書き）

珍しく、赤夜が弄られました。
結構弄るの楽しかった・・・。

15話

「兄さん、暇なら一緒に買い物行こうよ」

それは久しぶりの赤夜からの誘い。

俺はそれにパアアと顔を輝かせ、大きく頷いた。

「行く!!! 一緒に行く!!!」

「じゃ、準備して。僕玄関で待つてるから」

俺は急いで準備をした。

「兄さんがまた、転ばなかった。吃驚」

「其処まで? 其処まで吃驚するもの?」

「するもの」

俺は深く考えた。俺が転ばないことがそんなに珍しいのだろうか……? 前の買い物事を赤夜が母さん達に言ったら、母さん達は泣きながら俺の頭撫でくれたっけ? 何でだろ………?

「今、母さん達が何で前に泣きながら頭撫でくれたのか考えてたでしょ?」

「うつ……」

思いつくそ図星を突かれた。

「それは、ただ嬉しかったただだよ。兄さんが転ばなかったから、それが嬉しかったんだよ……」

「……」

俺は思わず赤夜の顔を見た。赤夜は俺に微笑んでくれた。

俺はどれだけ、馬鹿にされてんだろう………。

俺は今、そう思った。

「あれ？ 神楽じゃん」

「あ、赤夜じゃん」

「「あ」」

俺と赤夜はハモった。だって、目の前には男二人が居て、そのうち一人は、俺の友達で、もう一人は一度だけ観たことがある、赤夜の友達。・・・だったけ？

何だろう、赤夜の機嫌が一気に悪くなったよ。表情は一切変わってないけど、笑顔が怖くなってる。これは身内にしか判らない、違いである。

「何何、此の人、赤夜の彼女？」

「ちげーよ、こいつ男だぜ。兄かなんかだろ」

「初めまして。僕は『弟』の赤夜です」

「はあ、弟！？ マジで！ スッゲエ身長差あんじゃん！！」

あーあ、また痛い。ズキッと痛む。こんな顔、見せられない。赤夜に馬鹿にされる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・。うつぜえ・・・・・・・・」

赤夜は何かを呟いた。俺はそれを正確にとらえた。ああ、幻滅された。もつと前からだったけど、もつと幻滅されたや・・・・・・・・。

「済みません。用が無いのなら、帰らせてもらってもよろしいですか？」

「ちょ、何でお前そんな風に他人行儀なんだよ・・・」

「はあ？ 他人だろ？ 何寝言言ってるんだ？」

ヤッバイ。赤夜が完全に切れた。赤夜は切れたら口が悪くなるんだよ・・・・・・・・！

「大体、さつきも言ったが、用が無いんだったら、声、かけてんじやねえよ」

「っんだよ・・・・・・・・！ 気分悪ッ！ 帰ろっぜ」

「お、おう・・・」

あ、帰った。流石に此の時の赤夜に声はかけられない。きっと、赤夜から声をかけてくるはずだから、其の時を待とう。

「兄さん・・・。。帰ろっか」

あ・・・、笑ってる。本当に笑ってる。赤夜の笑顔の中で一番綺麗な微笑み・・・。。俺は此の微笑みが大好き。

「・・・うん・・・。。。。。。」

俺は笑って返事をした。

15話（後書き）

友達などが出ると、大体、シリアスになっちゃう。
悲し過ぎます。

16話

「おじゃましまーす」

今日は厭厭友達を連れてきた。

自分の家に友達でも、他人を入れるのは厭だった。でも今回は赤夜兄が許してくれたから、何となく、厭厭連れてきた。

「黒夜、お帰り。あれ？ お友達？」

「あ、白夜。帰ってたのか。そ、俺の友達。赤夜兄が珍しく許してくれたから、連れてきた」

「そっか、今お茶準備するから」

白夜はリビングのドアを開けて、キッチンへ向かった。

白夜が行った後、友人が俺の方を勢いよく向いた。

「誰！？ 今の誰だよ！ モノすごく綺麗じゃん！」

ああ、勘違いしてる。絶対に勘違いしてる。確かに、今日の白夜は男モンか女モンか判らない中性的な服を着て（しかもゴス系）、髪を横で括っているが、あいつは男で、俺の兄。どうしよう、教えようか、教えまいか。教えないで、こいつが勘違いしたまま、白夜に襲いかかったら、こいつは後で赤夜兄に殺されるし、でも、教えてもなあ………。

「まあ、俺の家族」

「何、妹！？」

「否、上」

「へえ………」

これなら後で色々言える。

「黒夜、お茶持って来たよ」

俺は思う。原因は外見だけでなく、口調にもあるんじゃないかと。こいつ、男のくせに丁寧だし。あ、赤夜兄もそうだな……。切れたら悪くなるけど。

「有難うございます！」

「サンキュ」

白夜は俺の友人に微笑み、退室した。やっぱ、勘違いされるのは、自業自得だと思う。

「やっべえ位綺麗だな！ 彼女にああいうの欲しいい！！」

「まあ、いいだろうな。ああいう『女』が居たら……」

俺は友人に同情の笑みを向けた。

「黒夜、ただいま、お帰り。其の人がさっき言っていた友人？ 初めまして、黒夜の兄の赤夜です」

「は、初めまして」

赤夜兄は友人に笑みを向けた。友人は赤夜兄が男と忘れて、頬を紅くした。赤夜兄は一瞬眉毛をピクツとさせたが、すぐに笑って、退室した。

「お前の姉さんと兄さん綺麗だな」

「おう、有難う」

どっちも男だけだなッ！！

「さて、今更だが、あの二人に自己紹介もう一回して来い。一緒に行くから」

俺はニツコリ笑って言った。ああ、此の後どうなるか、手に取るように判る。

「マジで！？ 行く！」

「初めまして。『兄』の白夜です」

「……………へ……………?」

ご愁傷様、友人。

16話（後書き）

後悔先に立たず。

赤夜達の友人は常にかうなる。

きっと、運命なんですよ。

17話

「姉さん！ 何、勝手に家に入ってるの！？」

「御免なさい、緑蘭。大丈夫、勺夜君に入れてもらったから」

「あなたッ、何勝手入ってるのッ！！ て、何、姉さんにかしずいてるの！？」

「義姉さんだし・・・、それなりのおもてなしをしなくちゃ・・・。
俺が死ぬ・・・」

勺夜さんは最後の言葉は小さく言った。

今日、いきなり姉さんが来た。あの子たちが学校行っている時でよかった。あの赤夜でさえ、調子が狂う、と言っていたし。

「聞いて、緑蘭。息子が離婚の危機何だけど・・・。どうしたらいい？」

「何で、そんな大事を私に相談するのよッ！！」

「貴女以外に頼れる人が居ないのよ」

「だからって・・・」

本当に姉さんはマイペース過ぎるわ……。でも、離婚の危機つて、何が合ったのかしら甥っ子に・・・。

「で？ 黒蘭こくらんはどうして、離婚の危機なのよ？」

黒蘭は私の甥っ子。相変わらず可哀想な名前。

「今更、好き嫌いで、喧嘩したみたい」

「下らないわねッ、激しく下らないわねッ！！」

何で黒蘭はそんなことで喧嘩したのかしら？ 下らないにも程がある。

「それがね、なんか好きな芸能人、嫌いな芸能人が二人共真逆で、それで喧嘩したみたい」

「内容も下らないわねッ!」

黒蘭の馬鹿ああーーーーっ!!

後曰。

「離婚しちゃった」

「阿呆おおーーーーッ!」

もういやよ、こんな姉と甥は!

17話（後書き）

大分、話がぶっ飛んでいます、気にしないでください。
と言うか、気にしたら負けです。

18話

「白夜ッ、可愛いぞ！ 今すぐ女になってこいッ！ 俺と結婚しようッ！」

「へ！？」

「死ね、黒蘭ッ！」

「ゴフウッ！」

着て早々、黒蘭兄さん死亡。（初出演だったのに……）
ご愁傷様……）

「勝手に殺すなあぁー！ー！ーッ！」

黒蘭兄さんが久しぶりに会いに来てくれた。だから俺は凄く嬉しくなつて、悶えている黒蘭兄さんに飛びついた。

「黒蘭兄さんッ久しぶりッ！！ 会いたかったです」

「お前完全にさっきの言葉無かったことにしたろ……？ まあいいや、久しぶりだなッ白夜、可愛いぞ、愛してるぞ、今すぐ女になれッ！」

「それは厭」

俺は笑顔でそれを断る。それになんか後ろが怖い。赤夜と黒夜が殺気だつてる。

「黒蘭、お前、白夜から離れる……」

「黒蘭さん今すぐ、兄さんから離れて……ッ！ じゃないと殺すよ……」

赤夜が怖いーッ！ 従兄弟の兄さんに対してそれは無いだろ……。あと、黒夜も珍しく切れてる……、恐いッ！！

「それは断る。俺も白夜と触れあいたい。ああ、白夜、また一段と可愛くなつて……」

「嬉しくない……嬉しくないよ黒蘭兄さん……」

「今すぐ嬉しくなれ」

「無理だよ……」

「無理？ まあ、取り敢えず未来の嫁となれ、白夜」

「黒夜、今すぐチェインソー持ってきて。本当に今すぐ」

「判った」

「待て待て待て待て待て待てッ！ 待つんだ二人」

俺は悪寒を覚え、二人を止めた。物凄く厭な予感がした。二人は此方をクルリと向いた。俺は二人の顔を見て、引き攣った。だつて、二人は眼が……、眼が据わっていた。

「判った。じゃ、兄さんから黒蘭さんから離れて」

「……判った」

俺はもう赤夜に逆らうべきではないと思い、黒蘭兄さんから離れた。すると、黒蘭兄さんは大ブーイングした。

「ええええー、離れちゃうのか？ 離れちゃうの白夜……？」

「離れます」

「お前、変なところ頑固だよな……」

黒蘭兄さんは俺のことを上目づかいで犬の様に睨んできた。

「赤夜の頼みごとなので……」

俺はニツコリ笑った。赤夜が頼み事するのは珍しいから、出来るだけ聞いてあげたいし……。

「お前等そろってブラコンかよ……」

「え？」

黒蘭兄さんが何かぼそつと呟いたみたいだけど、俺は聴こえなかった。ただし、二人は聴こえたらしく、黒蘭兄さんを足蹴にしていた。

「ふざけないで下さい……、幾ら年上だとしても、容赦しません

からね・・・」

「今すぐ帰れ、黒蘭・・・・・・・・。帰らなかったら今すぐ此処で殺すぞ・・・」

「殺されるのは御免だ。じゃ、俺は帰るかな・・・？　じゃあな三人共」

「バイバイ」

「・・・・・・・・」

黒蘭兄さんは最後に意味ありげな眼をしていたけど、俺は気にしないことにした。黒蘭兄さんが帰った後、何故か二人して俺に抱きついた。

「おわッ！！？　な、何・・・・・・・・！？」

「何でも（ない・ねえ）・・・・・・・・」

「・・・？　そっか、ならいいや。二人共、御飯食べよっか？」

「「うん・・・・・・・・」」

俺がそう言うと、二人は顔を上げて、笑った。やっぱり、此の二人と・・・、家族と一緒に居る方がいいや・・・。

後日、黒蘭兄さんが食中毒になり、入院したらしい。大丈夫かな・・・？

18話（後書き）

結局全員ブラコン・・・。

ま、大丈夫。ツンデレが二人程居るし。

大丈夫ですよね！？

19話

。 此処最近、兄さんが拳動不審気味……。なんか心配…………。

「兄さん、なんかあったの？ 此処最近様子変だよ…………？」

「えッ！？ な、何でもないッ！ 本当に何でもないッ！！」

兄さんはそう言っで、走っで、案の定転んだ。あ、なんか久しぶりに転んだの見たや。

オマケに黑夜達もなんか様子が変。僕を疎外しているようで……。なんか地味に寂しい…………。と言っか本気で寂しい…………。「何さ…………、皆して…………。」

僕は本気でいじけた。

いい加減切れて来たかも。ヤバい、幾らなんでも怒らずには居られない…………。父さんと母さんまで僕を疎外し始めた、完全に。イラつく…………。僕、何かしたかな…………？

「何だよ…………。何でオレがこんなにイラつかなきゃなんねえんだよ…………。」

僕はついつい、一人称を変えてしまった。切れた時、よく『オレ』と言っでしまっ。そして、僕は握っでいたシャーペンを握り折った。

皆が僕を疎外し始めて一週間たった。なんか今日、あつた様な気がする。なんか行事あつたかなあ…………？ 何だつたかな？

「おい、赤夜。お前今日『誕生日』だよな？ ハッピーバースデーッ！！ 赤夜ッ！」

僕は友人の言葉に眼を見開いた。

「え．．．．．？ 今日、僕誕生日だっけ．．．？」

「ん？ 携帯に登録してあるし、合ってるぞ。今日お前は１７歳になった」

「あ．．．．．」

もしかして．．．．．。

僕は顔が明るくなるのを自覚した。なんか家に帰るのが楽しみ．．．．．。

案の定、帰ったら熱烈歓迎された。

「ハッピーバースデイッ！ 赤夜（兄）ッ！！」

僕は皆がクラッカーを鳴らしたと同時にとても嬉しくなって力一杯笑った。

「．．．有難うッ！ 皆ッ！！」

僕は忘れない。此の誕生日を。皆が祝ってくれた、誕生日を．．．。ただし、馬鹿みたいにいじけた自分の姿は完全に記憶から抹殺するけど．．．。

19話（後書き）

なんか、赤夜がいじけると、調子狂う・・・。
何故でしょう・・・。

20話

「白夜ー、ちょっと頼みたいことがあるんだけどー」

「んー？」

俺は母さんの声がする方へ顔をのぞかせる。今日は創立記念日で休み。

「悪いんだけど、私作り忘れちゃって、二人に先に行ってもらったの。だから、届けてくれない……」

「わー。珍し」

母さんが作り忘れることなんて、今までに一度もなかったことなので、俺は吃驚した。

「よろしくね。白夜」

母さんはニコツと笑って、二人分のお弁当を差し出した。俺はそれを受け取り、行こうとしたら引き留められた。

「待って。髪、整えて行かないと……」

「えー。別に女じゃないからいいよー」

「駄目よ。男の子でも整えなきゃよ。赤夜と黒夜もしてるでしょ？」

確かに赤夜達は多少、ピンでとめたりもするが……

母さんは俺を自分の膝の上にのせ、髪を梳かし始めた。

「恥ずいんですけど……」

俺は顔を紅潮させた。母さんはお構いなく髪を梳かし続けた。

「だって、貴方私より小さいんだもの。丁度いいし……」

可愛い。あ、三ツ編みにしようつと

「母さん……」

十分後、母さんはやっと俺を解放してくれた。

俺は城かと思うぐらいの大きい学校の前に居る。流石国立だわー。
「赤夜になんか言われるかもだけど、いいか……。済みません、身内に物を届けに来たんですけど……」

俺は門番の人に用件を伝え、入れてもらった。

「……。玄関……。だよな……。……。?」

自分の学校の玄関の何倍もある広さに唖然としていた。

「今授業中かなー? 静かだし……」

廊下をのろのろ歩き、赤夜達の教室を目指す。赤夜達はトップクラスのAクラスのもっと上のスペシャルAクラスで、特別校舎らしい。

「我が弟ながら恐ろしい奴ら……」

キンコンカンコン……。

「あ、チャイム……。急いの方がよさそう……」

俺は得意な競歩で赤夜達の教室に急いだ。そして、転んだ。

「黒夜ー、僕弁当忘れたー」

「赤夜兄ー、俺もー」

グウウウウ……。

「「うつわ……。……」」

「あ……。見つけた」

俺はなんか話している赤夜達を見つけたので腕を振りながら呼んだ。

「二人共ー。やつほー」

「「!!!? ハアッ!? (白夜・兄さん) ツ!! 何で此处に居んだよ・居るの)!!!?」」

おおっ、二人は物凄く吃驚していた。当たり前かな・・・？

「母さんが届けてくれた。だから届けに来た」

「だからって何で（白夜・兄さん）が（来るんだよ・来るの）ッ！」

「創立記念日で休みだから？」

二人が何を慌てているかはさっぱりだが、俺は簡潔に、簡単にあっさりとした。

「ハアアアアアアアアアアアアアア・・・」

「何その超長い溜息・・・」

俺は二人をじっと睨んだ。すると、いきなり知らない人から声をかけられた。

「ねーねー。君、此処の子じゃないよねー？ 何で居るのー？」

「え・・・？ と、あの・・・？」

俺はどうしたらいいかわからず、おどおどした。早く帰りたいのに、帰らないと二人に迷惑がかかりそうで・・・。

「そっぴや、神楽達と一緒に居るね。何、知り合い？ なら紹介しろよー」

「そうそう、こんな可愛い子、滅多に居ないぜ・・・」

一人の男は俺をじっと、見つめてきた。俺はそれに人知れず寒気を感じ、鳥肌が立った。

「五月蠅いッ！ 此の人は僕の“兄”だッ！ それでも用はあるのッ！・・・」

赤夜が叫んだので俺は吃驚した。うわぁ・・・、物凄く赤夜が怒ってるよ・・・。黒夜も結構殺気だってるし・・・。二人共怖ッ！！

「さ、行こうか、兄さん・・・」。黒夜も・・・

「う、うん・・・」

俺は赤夜に促されるまま、動き出した。黒夜もあとに続く。

「これからは母さんに頼まれても、絶対に一人で来ないでねッ！
変な狼に喰われるからッ！！ 最近は綺麗なら性別関係無しっ、て
奴が多いんだからね！！」

「はい、判りました・・・」

何故か俺は感謝されずに、赤夜に説教されて、学校を後にした。

20話（後書き）

白夜は本当に男なのだろうか・・・？
作者でも謎・・・。

21話

それは、ホームルームHRの時の出来事だった……。

「……、メイド喫茶きっさ……?」

「そ、メイド喫茶。お前もメイドとして、働けよ?」

「んな……ッ!」

そんなの……、そんなのばれたら赤夜達に馬鹿にされるじゃないか……!!

ということで、学園祭がそろそろ始まりそうです……。

「……、メイド喫茶……? ふざけないでよ。絶対にやらないでよ、兄さん」

話したら、赤夜に怒られました。……何故?

黒夜も黒夜で、聞いたら無表情になっちゃうし、母さんは何時もより笑顔。怖過ぎる。

「うん。俺も全力で拒否したんだけど、先生が拒否権は無いって……。何かニヤついてたけど……」

ビキイッ!!

「……、赤夜……? どう、したの……?」

「……別に……」

“別に”って感じじゃないだろ……。何も無ければ、湯吞を握りつぶす必要もないわけで……。っていうか、握りつぶしたのッ!? 湯吞をッ!?

母さんも持っていたペンを折っちゃってるし……。黒夜

もさつきよりも態度が悪くなってる……………。テーブルに足置
いてるし…………。

「白夜…………。私、明日学校に乗りこもうと思ってるの…………。い
いわね？」

「否、よくないし。大体、そういうとき、了承得ないでしょ…………。」

「そうね。取り敢えず、お父様の権力を行使するわ…………。」

「其処でジイちゃんを出さないでよッ！！」

俺は何か今回は皆様子が変だなと思いながらも、言葉を続けた。

「取り敢えず、クラスの皆から頼まれちゃったし、先生も頼んでき
たし、やることにした…………。」

「……………………………………………………。」

怖いんですけど。皆さんそろって無表情で睨むとか、怖過ぎるか
ら…………。

本当に、今日の母さん達は変だったな…………。

21話（後書き）

鈍い白夜。

きつと赤夜と黒夜と勺夜と緑蘭が来るに
違いない・・・・・・。

22話（前書き）

学園祭当日。

さあ、どいなる事やら・・・。

22話

「相変わらず、ヒラヒラだよなー・・・」

俺は力なくそう呟いた。

俺はクラスの姉が作ったという、メイド服に身を包んでいた。しかもガーターベルトもオマケで付けている。スカートが短い所為で思いつくそガーターベルトが見えるんですけど・・・！ 恥ずかしい・・・。

「可愛いねー。流石、白夜ちゃん！」

「神崎さん・・・。俺男だから嬉しくない・・・。」

「そーお？」

彼女は神崎白蓮^{はくれん}。碧と紫を足した様な色の綺麗な髪色をしていて、瞳は碧眼。学年で一番可愛いと目されている（らしい）。

「神崎さんの方が可愛いと思うけどなー？」

「うん？ そう？ 有難う！」

神崎さんは綺麗な笑顔を俺に向けると、突然、慌て始めた。

「わ、わ。白夜ちゃん、私ちよつと用事あるから、御免ね！」

「あ、うん・・・。」

神崎さんは颯爽^{さっそう}と教室を出て行った。どうしたんだろ、何かあったのかな？ そう思いながら、俺はクラスの準備を手伝った。

学園祭、始まり始まり

。

22話（後書き）

此処で終了！。

きつと友人に怒られるな・・・。

23話

「い、いらつしゃいませー。3-Eの喫茶店、足休めに来てはいいかがでしょー？」

俺は店の宣伝をするために校舎を歩きまわる。所々に俺を見ては顔を紅くしている奴がいた。何故？

「ね、君。お店の宣伝してるの？」

見れば判るだろ。俺が言うのもあれだが、馬鹿だな。

「はい。あ、貴方達も来てくれますか？ 只今、サービス中ですので、行ってみてはいかがでしょう？」

俺は笑顔で言った。すると、男二人は顔を紅潮させた。…………

・何故？

「取り敢えず、そんな仕事ほっといてさ、俺達と遊ぼうよ。ね？」

「は…………？ む、無理ですよ…………。仕事中です…………。今日はずっと忙しいので…………。」

今日は何故か俺はずっと働かせられるはめになった。明日は一日中遊んで、明後日は午後だけ仕事で、其の後、後夜祭だ。（こごやまつり）

「いいじゃーん。ちよつと位さー。遊ぼうよー」

げ、肩掴んできた。気持ちワリ…………。こういう悪質な奴らっているんだよな…………。しょうがない。

「申し訳ありません。店に来ないと言うのであれば、用は御座いません。離して下さい」

俺は笑顔で、何時もより少し声を低くして、言った。

「…………！ そんなこと言っているのいかなあ？ 君はお店が大事じゃないのー？」

「…………そんなこと言うのであれば、来て下さいね？ 来ないと言うんでしたら、今すぐ離して下さい」

俺はもう無表情で幾分か声を低くした。男二人は少し物怖じした

が、諦めずに突っ掛つて来た。俺は流石に厭になり、ふう、と溜息を吐き、身体を低くさせ。

「は……？」

男の身体が宙に浮く。ズダンツと音がし、男は何が起こったか判らずに、ほけーとしていた。

「では、失礼します」

俺は其のまま踵をかえしたが、聞き覚えのある声が聴こえた。

「兄さん！！」

俺が振り返ると、赤夜と黒夜、母さんと父さんも居た。

「あ、皆ー。来たんだー」

俺は物凄い笑顔で手をぶんぶんと振った。そして、

「「「この、馬鹿っ！！！！！！」」」」

怒鳴られました。何で！？

「無事でよかった……。というか、うわぁ……。兄さん、『珍しい』ね……。人を投げるなんて……」

赤夜は未だに呆けている奴を見た。

「ああ、久しぶりに投げたから、肩が痛い……」

「白夜は滅多に人投げねえからな……」

黒夜も殺気のこもった眼で男を見た。

「もう、白夜が人を投げてるから驚いたのよ……！」

「驚かさなくてくれ……」

母さんは少し俺の頬をつまみ、父さんは乱暴に頭を撫でたきた。

「ごめん。ごめん……」

確かに、俺にしては珍しい事をしたかな？

そして、家に帰ったら、皆に追加説教をされました。
何でさ……。

23話（後書き）

実は白夜は物凄い怪力で、柔道とかもやってたり・・・。
ま、宝の持ち腐れですが・・・。

24話（前書き）

ちよつと遅いけどクリスマスの話。

24話

今日はクリスマス、聖夜だ。

家では、毎年ケーキは手作りで、ローションして誰かが作る
ことになってる。今年は俺が作る番だ。と、いうことで皆でお買い
もの。

「皆でお買いものは久しぶりねー」

「ああ、こうやって休みがとれてよかった」

「白夜、転ぶなよ？」

「ホント、転ばないでよ、兄さん」

「酷いよっ！！」

俺たちはワイワイ喋りながらスーパーへ入って行った。中は完全
クリスマスモードで、レジの人もサンタ帽をかぶっている。なんか
一人、異様に厳いようつ男の人が居るけど、気にしないでおう。

「今年はチョコケーキね。ビターチョコ！」

「兄さん、僕が苦いチョコ嫌いだと知っていてそれを選ぶの？ 手
作りは物凄く嬉しいけど、ビターチョコは嬉しくない」

「・・・判った。普通の甘いチョコにする・・・」

何で赤夜は辛いものと苦いものが嫌いかなー？ 美味しいのにー。

「よし、こんなものかな？ さ、レジ行こっかー」

俺が振り向くと、皆おの各々の好きな所へ行っていた。

「居ないし・・・」

これで歩き出して迷子になったら皆に怒られるし、此处で他の物
でも見ているか。 あ、可愛い包装紙がある。来年のバレンタ
インにでもチョコつくって皆にあげようかな？ あ、神崎さんにも
あげよう。

「さて、皆遅いなー」

そう言った矢先、

「「「（白夜・兄さん）ー！ これ（買って・買え）ー！」「」」
「皆俺の自腹と判っててやってるの！？ 悪質だよ！」

追加、ケーキ当番は材料は自腹である。変だろ、これ。

「・・・、何でココア飲むのにいちいち汚す兄さんがケーキだけは
上手く作れるかな・・・？ というか、料理全般作れるよね・
・・・？ 何でココアだけ破滅的？」

「「「・・・」「」」

「止めようよ、其の沈黙・・・。。取り敢えず」

「「「「メリークリスマス！！」「」」」

ケーキは皆で美味しく頂きました。まーる。

24話（後書き）

楽しかった、書くのがとてつもなく、楽しかった。
今度は新年会を書きます。
その間に何か書くと思いますけど。

25話

「冬將軍、去れやあー！ー！ー！ー！」

我が唯一の弟、黒夜が、炬燵にもぐり込みながら、マスクをしつつ、外に向かつて叫んだ。

「黒夜、喉を痛めるから、叫ぶのは止めようね？」

「はい……」

只今、風邪知らずであつた黒夜がおとつから風邪をひいています。

兄さんは今まで風邪をひいたことがない黒夜を四六時中、看病をしている。僕はと言うと、体調の悪い黒夜の為に、おかゆを炬燵に入りながら、ガスボンベで作っていた。だって、キッチン寒いんだもん。

「御免なさい、赤夜兄……。風邪なんてひいちゃって……」

「いいよ、黒夜は滅多にひかないし、たまにはいいんじゃないかな？」

僕が微笑んで、優しく頭を撫でてやると、黒夜は「うー」と唸つて、少し炬燵に顔を引つ込めた。僕はそのまま、おかゆを煮詰めた。実際、炊飯でも出来るんだけど、さっき言った通り、寒いからと、こうしてれば、黒夜の傍に居られるしね？ だから、こうやって作ってるんだよね。

「そろそろいいかな？ 兄さんー、悪いけど、深めのお皿持ってきてー」

「はい、判ったー」

兄さんは、返事をして、皿を持ってきてくれた。此处最近、兄さんが転んでるところを見なくなった。……楽しくない……。

「黒夜、御飯食べる前に、体温計って」

「んー・・・」

黒夜は身をよじらせ、炬燵から出て、兄さんから体温計をもらい、計った。

「・・・38 6分か・・・高いね。もう少し寝ててね？」

「んー」

「黒夜、はい、おかゆ。少し熱いからね。気を付けて」

「んー・・・」

終始黒夜の返事は浅かった。

「すう・・・」

「ゆっくり寝てるね。よかった。最初の時なんて、魔されてたもんね」

黒夜は最初の一日は寝ててもずっと苦しいのか魔されていた。家族で心配になり、黒夜を囲んでいたっけ？

「じゃ、僕らも寝よっか？ 兄さん」

「うん。そうしょ」

僕と兄さんは上に上がって、寝た。

次の日、黒夜はすっかり快復した。だけど、兄さんが風邪をひきました。

25話（後書き）

風邪っぴき黑夜。

書いていて楽しかった・・・。

26話

「新年会・・・、そろそろだっけ？」

俺の呟きに皆が反応した。

「「「「あ・・・」」」」

そろそろ、母さんの実家で新年会が行われる。俺たちは毎年それに出席している。

「ああ、そろそろね・・・。新しいスーツを新調しなきゃ・・・。」

「母さん、毎年新調してるよね・・・。」

毎年、俺達の着て行くスーツが違い、其の着たスーツは終わった後、古着屋へ出される。もったいないよね・・・。

「今年はどんなスーツにしようかしら・・・？」

「白夜は紅のスーツに白のシャツ・・・。赤夜は黒のスーツに紅のシャツ・・・。黒夜は白のスーツに黒のシャツ・・・。で、いいんじゃないか？」

「うーん・・・。そうね、そうしましょう！　じゃ、父様に云って、新調してもらおうと！」

「「「母さん・・・。」」」

俺達は母さんをじとつと睨んだ。毎度毎度、爺ちゃんを使いつぱにして・・・。まあ、母さん・・・、娘に甘い爺ちゃんもあれだけだね・・・。

「新年会かー。そういや、毎年三が日、ホテルで過ごしてたなー。

俺達三人でキングサイズのベッドで雑魚寝・・・。」

「あー、そういえば、毎年三人で雑魚寝してたねー」

「そだね。絶対に兄さん上半身落ちてるよね……」
「うー」

赤夜と黒夜と俺で、今縁側で雪見をしている。これも毎年やっている。吐くと、息は白い。それが、綺麗に見える。

「新年会、楽しみだな……」

「ああ、そうだな……」

「だね……!」

まだ、正月じゃないけど、俺達は一杯、甘酒を飲んで、寝た。

26話（後書き）

三人そろって、雑魚寝・・・。

想像できる！

可愛いもんですね、小さい頃とかは・・・。

27話

華やかな会場。俺たちは今、神田グループが経営するホテルに居たりする。あ、神田というのは、母さんの旧姓です。

「相変わらず・・・というか、改築した？ 此処・・・・・・・・」

「したらしいわよ。父様も暇ねー」

母さんがそれを云うかな、それを・・・・・・・・。

「にしても、スーツ。それにしといてよかったわー。皆恰好いい！

あ、白夜は可愛い！」

「差別だー！」

俺は泣いた。確かに、赤夜と黒夜は様になつてるよ！ 確かに、

俺はさつき、親戚に「立派になつて・・・」とか、「七五三・・・」

とか呟かれたり、云われたりしたよ！それでも、可愛いはある

だと思ふんだ・・・！

ついでに、俺たちは父さんが前に提案したスーツで、俺が紅のスイツに黒のネクタイと白のシャツ。赤夜が黒のスイツに白のネクタイと赤のシャツ。黒夜が白のスイツに紅のネクタイと黒のシャツである。これまた、以外に似合っている自分等が怖い・・・・・・・・。

母さんは黒の肩だしドレスにファーのベスト。髪は軽く巻いて、頭の横で括っている。父さんは鼠色ねずみのスイツに白のベストと黒のシャツ。髪は何時も通りに後ろで括っている。

あ、俺も後ろで括っているんだよな。赤夜が楽しそうに結んでくれたっけ？ 頼んだら、物凄く嬉しそうだった。不気味・・・・・・・・。

「おーい、白夜、赤夜、黒夜ー。こつち、こつちー！」

「あ、黒蘭兄さん！ 来てたんだ！」

声がる方に向いて見ると、黒蘭兄さんが手を振ってこつちに來ていた。

「当たり前、俺だって神田家の血縁者なんだぞ？ 来るに決まってる。それに、白夜にも会えるしな！」

「気持ち悪い！」

「笑顔で云うな。そして、お前性格酷くなってるぞ？」

「気の所為です」

黒蘭兄さんはうろんげな顔して此方を見てきたけど、諦めたように、母さんに話かけ始めた。

「お久しぶりです、緑蘭さん。こないだはお騒がせいたしました・・・」

「本当に」

「子がいなら、親もだな・・・・・」

「それはお互い様よ、黒蘭」

母さんは笑顔で黒蘭兄さんを威圧しました。これは誰も勝てない。此の威圧には、父さんも勝てないのだ。恐るべし、母。

「あ、ははは・・・、ですよねー・・・。白夜、白夜ちよつとこつち・・・・・」

「ん？ 何？」

俺は黒蘭兄さんに連れられ、隅に行った。

「で、どうしたの？」

「何で、緑蘭さんってあんなに怖いんだ・・・・・？ 今まであんなじゃ、無かったぞ・・・」

「兄さんが怒らせたからだよ……。昔の事を思い出させるから……。例えば、下らない離婚の危機の話とか……………」
「く、下らないとか云うなあ！」

黒蘭兄さんは泣きだした。此の人何歳だっけ？

「おお、白夜。スーツが『やつと』似合う歳になったか！ わしは嬉しいぞ！」

「『やつと』と云われたことに嬉しさを見いだせない俺は正しいよね！？」

久しぶりに会った爺ちゃんとは相変わらず、元気だった。そういや、歳聞いたこと無いや。幾つだろ……………？

「お久しぶりです、爺様。婆様のお加減はよろしいのでしょうか？」
赤夜が礼儀正しく云う。親しき仲にも礼儀ありつてやつだな。

「おお、赤夜。律は大丈夫だ。少し身体の調子も快復してきたからな。心配無用じゃ」

「ご無事で何よりです。爺様もお身体にはお気をつけ下さい」

「ああ、心配有難うな、赤夜」

赤夜はニコツと笑い、後ろに退き、次に黒夜が挨拶を始めた。

「お久しぶりです、爺様。お元気そうで何よりです。今後とも、お身体には気を付けて下さい」

「有難うな、黒夜。三人共、本当に良い子じやのう。黒蘭は「元気にしてたか？ 爺い！」と云ってきおったからな……………」

「……………今すぐ、勘当すべき！！……………」

「わしも、それは思っておる……………」

つくづく、可哀想な黒蘭兄さん。というか、自業自得？

その後爺ちゃんの挨拶が終わり、各々に雑談を始めた。俺は赤夜を黒夜と一緒に行動していた。だって、二人が離れないんだもん。

「やっぱり、三人は可愛いわねー。ねえ、兄さん」
「そうだね。紅蘭」

声が聴こえた。其の声に、俺達は身をすくませ、恐る恐る振り向いた。其処には『あの人達』が居た。

27話（後書き）

はい。変な所で終了ですね・・・。
続きは明日更新をしますね。

28話

「こ、紅蘭さん・・・青蘭さんせいらん・・・」

「お久しぶりね。白、赤、黒。元気そうで何よりだわ」

「ほんと、元気そうでよかった・・・」

此の人は母さんの姉と兄の紅蘭さんと青蘭さん。此の二人は二卵性双生児なのだ。

「お、お久しぶりです・・・。紅蘭さん、青蘭さん・・・。そちらもお変わりなく、元気そうだなによりです・・・」

おおう、赤夜の笑顔が引き攣つてる。相変わらず、此の二人の事苦手だよな、赤夜・・・。

「クス・・・其処まで怖がらなくていいのよ？ まったく、小さいころとなんら変わっていないわね・・・」

「だね・・・。ああ、白夜・・・可愛いね。スーツを着てるんだ・・・。。ドレス着てくればいいのに・・・」

「酷いです、青蘭さん・・・」

青蘭さんは俺の髪を梳くのが好きなのか、ずっと梳いている・・・。そっぴや、母さんに会った時もずっと梳いている・・・。髪が好きなのだろうか？ あ、此の人美容師だった。

「あ、兄さん、姉さん・・・。久しぶり、元気そうだよさそうね・・・」

おお、助けとなる母さんが登場。赤夜が無意識に安堵していた。俺と黒夜は少し赤夜の背中に手を添えた。

「緑蘭！ 久しぶり（ね・だね）！ 相変わらず、可愛い（ねえ・なあ）……………」

此の溺愛^{できあい}ぶりったら……。神田兄妹の中だと母さんが断トツ美人なので、紅蘭さんと青蘭さんはとても可愛がつている。

「ほんと、かわあいわねえ……。！ ねえ、兄さん！！」

「だね、可愛いね。流石、僕の緑蘭……………」

「何時私は兄さんのモノになったのかしら…………？ 謎だわ……………」

母さん、それは同感です。

「じゃ、母様の様子を見に行ってくるから。私達は帰るわね」

「またね。緑蘭、白夜、赤夜、黒夜」

「…………さよなら……………」

とことんマイペースな人等だ…………。

「久しぶりに会った親戚の人達が元気そうでよかった！」「だね！」

「元気あり過ぎる奴らも沢山だったかな……………」

「だねえ……………」

こうして、俺達の夜は更けて行った。

28話（後書き）

神田家の話も書いて見たいですね・・・。
ホント・・・・・・・・。。

29話

皆さんお久しぶりです、ども、赤夜デス。いかがお過ごしですか？ 僕は目下勉強と兄さん苛めを楽しんでいます。

ですが、今兄さんは受験生。そろそろセンターも近いので、僕が暇を見つけては兄さんに勉強を教えています。

兄さんがちゃんと大学に受かるようにと、頑張っているけど、一つ・・・心配なことがある。

僕は兄さんが何処の大学に受けるか、聞いていない。

それで兄さんがもし、県外の大学を受けることになるのであれば、兄さんは僕の傍に居てくれない。それが、怖い。

「兄さん。そう言えば僕、兄さんが何処の大学に行くのか聞いていないんだけど・・・」

「あ・・・、云ってないね・・・」

本当は、聞きたくない。だけど、聞いた方がはじめをつけられると思う。

「よくは決まってるけど、実家から通える大学がいいな、と・・・」

「・・・ッ!!」

よかった、兄さんが家から出て行かなくて。僕は天の邪鬼だから、素直なことは云えない。

「そう。県内の大学が受かるといいね、馬・鹿・に・い・さ・ん!」
「酷い、赤夜! 受験生に対して酷いよオッ!!!!!!」

これが僕のせめての嬉しさを含んだ言葉。馬鹿だけど、大切な兄さん。僕の傍から離れたらどうなるか知ってるのかな？ 兄さん・・。

センター前の実力テストにて。

「・・・・・・・・・・・・・・・・兄さん、僕が此処まで教えて25点つて・・・・・・・・」

「済みませんでしたア！」

さて、どう扱しけばこの馬鹿は人の教えた事をちゃんと覚えれるのかな？ 本当に・・・・・・・・。

29話（後書き）

赤夜つて・・・。

30話

センター前日。はつきり云って、

死にそう……………。

「ああああ、明日だあああああつ！ ややややや、ヤバイiiiiiiiiiiiっ！」

椅子に座りながら貧乏ゆすりをしてると、母が笑いながら「やめなさい」と云って来た。殺される前に止めておこう。

「兄さん、もうちょっと落ち着きなよ。まあ、確かに？ 兄さんの頭でセンターが合格するかは、謎だけど……………。少しは落ち着いて、挑まないと、死ぬよ？」

「酷いよ！？ 受験生に向かってその言葉は酷いよ！！」

「……………よく思っただけど、兄さんって、パツと見……………受験生じゃないよね……………？」

赤夜が残念そうな、可哀想な者を見るかのような眼で俺を見る。其の視線が居たたまれず、俺はテーブルに突っ伏す。

「酷い、酷いよ赤夜……………！」

「うん、御免ね？」

「疑問形iiiiiiiiiiiiiiii！！」

俺と赤夜のやり取りを母さんは和やかな眼差しで見ていた。

父さんが帰宅。会社の時はオールバックなんだけど……………、何か、ヤーさんみたい……………。

「白夜、明日センターだけど、大丈夫か？」

「心の傷をえぐらないでくれ、父よッ!!」

「.....済まん？」

「何故に疑問形いいーーーーー!!?」

俺は叫びながら床に突っ伏した。本日二回目だ。父さんは肩を揺らしながら笑いを堪え、俺の肩を軽く叩いた。十分に傷つく行為だった。

父さんが普段着に着替え、前髪を下ろし、後ろで括って、リビングに戻ってきて、家族団欒かぞくだんらんが始まる。俺は赤夜と黒夜に罵倒されながらも勉強をする。

「ああ、楽しみね、センターの結果が.....」

「まだ終わってないんだけど!？」

「さて、結果が心配だな.....」

「本気で心配されてる!？」

「.....」

「何かを云おう、弟二人!」

「ハアア.....」

「皆そろって溜息ですか!? 傷つくッ。今のが一番傷ついたッ!」

。。
ややあつて、俺は寝た。夢をみたが、それは悪夢だった.....

30話（後書き）

センター前日。私の兄もそうなんでよね・・・。

31話

センターが終わって、少し時間に余裕が出来た。だけど、二次試験がある……。俺はもう死ぬ。

「兄さん、そろそろ勉強しなよ？　そういえば、兄さんって理系？　文系？」

「……………文系……………」

「うっそだぁ……………」

「聞いておいて、否定しないでくれる！？」

赤夜に叫んで、俺はソファに埋もれる。ふかふかしていて、気持ちがいい。眠気が……………。

「そぉ……………れっ！」

「グフオオツ！！？　あ、赤夜、何をするッ！」

「？　何って、背中に肘鉄。勢いも付けて」

「要らないわぁッ！」

赤夜は至極当然と云った顔で云った。本気でこんな弟やダ……………でも、勝てるとは思ってない……………。悲しい……………。

「兄さんが飽きないでゼミとかやってれば、こう云うことにはならなかったのに……………」

「だって、難しいんだもん」

「はぁ……………」

「溜息とか止めようよ。めっちゃ傷つくから」

俺は赤夜を背もたれに座っていた。其の俺の膝に黒夜の頭がのっている。変な状況だ。

「まあ、白夜、落ち着け。今のお前はやるべき事がある」

「？　何、黒夜」

「死ぬほど勉強」

「判っていたけど、本当に云われると傷つく」

俺は黒夜の髪を梳きながら云った。黒夜は気持ちいいのか眼を細めた。

「・・・・・・・・気持ちいい？」

「ああ・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・眠い？」

「ああ・・・・・・・・すう・・・・・・・・」

「ッ！？ 寝たッ！」

「わー、吃驚・・・・・・・・」

手を離すと眉間に皺が寄った。・・・・当分解放されそうもない。

「黒夜のあどけない寝顔、久しぶりに見た・・・・・・・・」

「僕もかな？ こうやってると、本当に可愛い弟だな・・・・・・・・」

「だね」

俺と赤夜で黒夜の髪を梳き続けた。

31話（後書き）

黒夜の甘え。
可愛いなあ・・・。

32話（前書き）

黒夜の甘え、2。

32話

「不覚だ．．．．．」

俺はソファでガックリと頂垂れた。赤夜兄と白夜は苦笑した。

事の発端は、さっき俺が白夜の膝の上で其のまま寝てしまった事である。その間、二人は俺の髪を梳き続けていたらしい。

「だって、黒夜の髪柔らかいんだもん。触ってて気持ち良かったし．．．．．」

「そうそう、黒夜の髪は猫っ毛で柔らかいし、さわり心地よかったし．．．．．」

其の発言に、もつと肩を下げる。

「黒夜、疲れてるんじゃないの？ 薄らだけど、眼の下に隈くまあるし．．．．．」

「んー．．．．．最近寝付き悪いのかも．．．．．」

そう云うと、白夜はもつと心配そうな顔をした。こんな顔させる
と、流石に罪悪感。

「そんな顔するな。お前のそんな顔見たくねえ．．．．．」

「あ、御免、ちょっと黒夜が心配で．．．．．」

「黒夜、たまには兄さんに甘えたら？ 兄さん面倒見いいよ？」

赤夜兄がにやにやしながら云う。俺は少し赤面させ、初めて赤夜兄を睨む。

「それはいい。取り敢えず、白夜、もっかい膝枕して」

俺が云うと、白夜は眼を見開き、微笑んで、受けてくれた。

「いいよ、はい」

「サンキュ．．．．．」

「ごろりと、膝の上に頭を置く。こいつ、男のくせに柔らかいな．．．．．」

「寝心地いい、低反発枕みて・・・」

「微妙に、嬉しくない言葉・・・」

白夜は苦笑した。だけど、文句を云わずに、膝枕をしてくれた。

たまには、兄に甘えるのもいいな。特に白夜には、な・・・。

そう思い、俺は意識を手放した。

32話（後書き）

少し短いかも知れませんが、悪しからず。

33話

そろそろ（と云つても、もうちょつと後だけど）聖・バレンタインです。だから……

「おっと、大丈夫かい？ 怪我は？」

と、男子が媚こびを売っています。僕はああいうの見ていて、吐き気がします。

此処最近はスーパーがバレンタイン一色な為、全体的にピンクになつている。行くのが億劫だ。

「兄さん……悪いけど、僕の代わりにお買い物行って来てくれる？」

「ん？ いいよー」

兄さんだったら、女子の間に紛れててもばれはしないだろう。御免ね、兄さん……

「ただいまー。赤夜ー、何で店ん中真っピンクなんだろうー？」

それを僕に聞きますか！？ 普通！

「あーつとねー……。そろそろ聖・バレンタインだからじゃないかなー……？」

「あー……成、程？」

其処で疑問形になるのは可笑いよ、兄さん。

黒夜が帰つて来た。何故かげっそり頬こけているけど……
何で？

「黒夜？ どうしたの？」

「あ、赤夜兄ーい！ 女子怖いんですけどおーッ！」

成程、告白を女子から散々やられたわけだ。

「しかも、先輩からも来たあー！ あの人、ホモセクシユアル同性愛者だったあーッ！ 怖いー！！」

「怖いね、それは激しく怖いね」

僕はよしよしと黑夜の頭を撫でる。ホント此の子の髪は柔らかくて、さわり心地いいや・・・。。

「あ、そういえば、俺も告白されたなー」

ピタリ

確かに僕はそう云う音をたてそうな勢いで身体の動きを止めた。

「・・・告白、され・・・た・・・？」

「うん。された。同じクラスの女子で、何か昼休みに呼ばれて・・・

・・・」

「・・・体育館裏で？」

「？ 何で判ったの？」

典型的だな、おい！

取り敢えず、僕の兄さんに告白した命知らずの人を探し出さなきゃ・・・。。

34話

「バレンタインには、荷物検査するからな！ 持ってきている奴らの部活は、即刻、一週間停止だからな！」

先生のその言葉に、クラス全員が怒鳴る。

『ふざけるなああ

ッ！！！！！！！』

「ふざけているのは、貴様等だッ！」

先生、僕は貴方に賛成です。

この発表により、一週間前からのチョコ渡しが炸裂している。此処まで必死になっているのを見ると、物凄く関心します。

「チョコ一つだけで・・・此処までするかな？ 普通・・・・・・・・」
「するんだよ。それ程自信作何だろ」

「手作り前提だね、其の発言」

僕は苦笑する。すると、友人はがつついてきた。

「あつたりまえだ！ バレンタインだぞ、バ・レ・ン・タ・イ・ン
ッ！ 年に一度のイベントに、市販のチョコ持ってくる奴がいるか
！」

「いるでしょ？」

即答してやる。何を夢見てんだ、と云う眼で眼で見ながら。

「お前、夢無いよな・・・・・・・・」

「そんな無駄な夢もったって、しょうがないでしょ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

流石に返す言葉が無いのか、友人は溜息を吐き、他の男子の所へ行った。

さて、今日は兄さんとお捕まえて、一緒に買い物に行こうかな？
黒夜も一緒に来てくれるかな？

僕は淡く笑い、席を立った。

35話

俺の学校は、結構フリーダム。

「今日は家庭は、バレンタインのチョコ作りですよ」

『イヤッタアア

ッ!!!!』

此の学校って・・・・・・・・。。。

「わー、神楽案外上手だな」

「家でも料理するしね」

「ますます女つばいな」

「さらつと酷い事云わないでよ!」

怒鳴りながらも、ゆせんの手を止めない。ちゃんと掻き混ぜないとね。赤夜と黒夜、喜んでくれるかな?

「神楽は誰かにあげんのか?」

「うん、弟達に」

「お前・・・・・・・・、夢ねえな」

「何かなー・・・」

俺は半眼になって友人を睨む。

さ、飾り付けた。

・・・先生、どんだけ気前いいんですか・・・・・・・・??

先生が用意したのは、ハート型とか星、その他の物凄い凝った型とか、チョコペン、アラザンとかのもの。勿論女子は騒ぎまくっている。

二人はアラザン好きじゃないし・・・と云うか変に飾りが付いているのを嫌うしな・・・。取り敢えず、二人の好きな型で作るか。

「あ、クマがある」

ああ見えて、黑夜はクマが好きだし、これにして・・・。

「あ、ウサギがある」

ああみえて、赤夜はウサギが大好きだから、これにして・・・。

あ、顔を付けるぐらいなら、いいかな？

俺が楽しそうに作っているの（しかもファンシーなものを）、友人が質問してきた。

「お前の弟って、幾つ？」

「ん？ 17と16」

「ブッ！！？」

突然噴いたので、俺が怪訝な顔をしてると、友人は叫んだ。

「お前、17と16の男に、何ファンシーなもの作ってんだ！」

「本人達が好きなんだから、いいじゃん」

「・・・そーだけどよあ・・・」

未だに喰いついてくる友人に、ちよつと俺もキレた。

「別に、お前が喰う訳じゃないんだし、文句云うなよ。ウザったい」
「んな・・・！」

友人が憤りを見せたので、鳩尾を殴って黙らせました（ニコッ）。

その後、ちゃんと綺麗に作れたので、俺は満足して、家に帰って二人にあげました。

二人も用意していたらしくて、交換しあったんだ。

楽しかった！

35話（後書き）

怒らせると意外と白夜が一番怖いかも・・・。

36話

僕は自他共に認めるブラコンだけど、最初っからブラコンだった訳じゃ無いんだ。

これは、僕の醜い小さい頃の話。

兄さんは、ご近所でも有名な美少年（少女）で、可愛いと持て囃されていた。

だけど、可愛いと云うのは、いいことだけじゃ無かった。

度重なる誘拐、未遂、痴漢。その所為で兄さんは完全に自分の殻の閉じこもってしまった。

元から小児喘息とかで、家に閉じこもりがちだった兄さん。

そんな兄さんにつきっきりの母さんと父さん。

僕はそれなりの体制はついていたけど、幼い黒夜は違った。

「母さん達、また白夜だけ……ずるい」

“ずるい”

大分心の奥に隠していた感情。

“ずるい”

“何で？”

“どうして？”

“憎い”

“羨ましい”

そんな感情が、黒夜の一言で心を一杯にした。

“殺してやりたい”

僕は、惨めだった。

兄さんが風邪をひいた為、母さん達は兄さんの部屋に籠った。僕等の御飯を作る以外は、兄さんの看病をしていた。

ある日、それなりに動けるようになった兄さんが部屋から出てきて、僕はちあわせになった。

「あ、せきやー！」

純粹無垢に微笑み、僕に近付いてくる。

コロシテヤル。

イナクツテシマエ。

「ち、」

「ん？」

「近付くなッ、お前なんて居なくなれッ!!」

ドンッ

次に目を開けた時には、兄さんは居なかった。

恐る恐る階下を見ると、見慣れた白髪が床に無造作に流れている。

「に、いさ・・・ん？」

名前を呼んでも、返事が無い。僕は慌てて階下へと下りる。

「兄さん、兄さんッ!？」 起きてよ、ねえ!・・・・・・ッ、お兄ちゃん・・・・ッ!!」

その後、母さんが救急車を呼び、兄さんは搬送された。検査結果は“のうしんどう脳震盪”。

「御免、御免なさい、兄さん・・・・・・」

「? 何で、せきやが謝るの? 是は、僕の所為だよ」

兄さんは笑って云う。

「んなっ、違うッ。僕が兄さんを……！」

「うっん、僕が悪い。僕が二人に寂しい思いさせたんだもん」

その言葉に、僕は打ちのめされた。

気付いていたのだ。僕と黒夜の気持ちを。兄さんは気付いていたのだ、自分が恨まれていると。

「だから、せきやは悪くない」

「……ッ!!」

僕は、何でこんなにも心優しい、純粹無垢な兄を恨んだのだろうか？

「ごめん、なさいい……お兄ちゃ、ん……！」

僕は堪え切れず泣いた。兄さんは微笑んで、黙って僕の頭を撫でてくれた。

守ろう。

この兄を。

優しくて、純粹な大切な兄を。

一生、一緒に、傍に居て、僕のこの手で、守る。

絶対に。

36話（後書き）

たまには、シリアスもよいかと、思いまして・・・。

37話

うちは、ご近所でも有名な仲の良い家族。俺も、そう思ってる。

さらり、と白い髪が流れる。俺はそれを手にとって梳く。白夜は一瞬こちらを振り向きかけたが、微笑んでまた赤夜兄と話し始める。
「・・・シャンプー、母さんの使ってるだろ？」

「・・・・・・・・。何で、判った・・・」

「・・・匂い、かな？俺と赤夜兄のはトニックシャンプーで、こんな風に花の香りはしないからな」

「ご明察・・・・・・・・」

白夜は苦笑いをし、俺の頭を撫でる。赤夜兄も、こっちに来て、俺じゃ無くて白夜の髪を梳く。

「まあ、確かに花の淡い香りはするね。それに、さらさらだ」

赤夜兄まで梳き始めたから、スペースが無い。まあ、其処は譲歩し合いながらやるが。

「・・・・・・・・・・・・・・・・すう・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

何時かの逆だ。俺と赤夜兄はそう思った。

俺はそれでも微笑み、梳き続けた。こうやって、健やかに寝ている。白夜を見るのは久しぶりだ。やっぱ、母さん似だよな、こいつ。
「ホント、女みたいだよなー、こいつ・・・」

「本当にね。まったく・・・此の容姿の上、此処まで無防備だと、

護ってるのがたるいよ」

「だな」

こいつが何も知らないうちに、俺達は血の滲むような努力をしたと云うのに……。返り血浴びたり、返り血浴びたり、返り血……（エトセトラ）。

「まあ、こうやって純粹で居てくれたら、いいんだけどね、僕としては……」

「俺もそう思う」

兄の様で、弟の様で、姉の様な存在の兄。

俺達にとっては、掛け替えの無い、大切な兄。

手に届くうちは、俺達の手で。

37話（後書き）

最近はこんなノリ。

38話

さて、突然ですが。

そろそろ卒業シーズンです！

「俺もとうとう卒業かー。わー、実感わかないやー」

「そりゃ、ね……」

黒夜が頷いてきました。ですが、

「絶対、お前と俺とじゃとらえ方が違う気がする」

俺がそう云うと、黒夜は苦笑いをした。

「……そー、か？」

「だって、今腹抱えてんじゃん！ 完全に抑えてるだろッ！？」

黒夜はとうとう耐えられないと云うように、盛大に笑いだした。

も、俺泣きそう……

「コラコラ。黒夜はそうまた兄さんを苛めないの。僕だってどうにかこうにか抑えて……ッ」

「抑え切れてないじゃん！！」

何だろう。卒業と云う意識が遠のいて行く気がします。俺の気の所為？ 本当に！？

「それにしても。そっか、兄さん卒業、か……。もう、そんな時期なんだね」

「あー、そう云えば。そんな時期、何だな……」

「『雪、降ってるけど……』」

そうなんです。今は3月上旬。なのに大雪が吹雪ふいいています。

「・・・俺、明後日卒業式なんだケド」

「奇遇きぐうだな。こっちの高校も明後日だ」

俺と黑夜は乾いた笑みを窓に向かつて向けています。赤夜は俺等を見ながらお茶を啜すすっています。ああ、とことんな兄弟。今更だけど。

「聞きなさい、白夜、赤夜、黑夜!!」

と、いきなりお母さんが入ってきました。きつとこんな豪快な母だからうちでは反抗期が無いのだ(恐ろしいと理由も有るけど)。

「で、どうしたの? お母さん」

「フッフッフッ。よくぞ聞いてくれたは、赤夜!」

いや、お母さんが聞けつて云ったんじゃない。

「お母さん、赤ちゃんが出来ましたあ!!」

ガッシャン

赤夜が湯呑を落とした。それ程吃驚したのだろう。

「赤、ちゃ・・・んって・・・。其れ、本当・・・?」

赤夜が珍しく動揺してるなあ。俺も吃驚したけど。

「ええ。女の子かもって! 嬉しいわー」

女の子か。妹か、嬉しいな、それは。あー、楽しみだなー。

「「要らないツツツツ!!」」

二人が叫んだ。俺は二人を交互に見た。二人共、冗談じゃ無くて本気で拒絶の顔をしていた。それにお母さんは溜息を吐いた。

「二人はそう云うと思ってたわ。大丈夫よ、急かさない。もう少し、時間をあげる。それまでに考えておいて」

お母さんは良い終わると、リビングを出て行った。

「ふ、二人共、何で・・・・・・・・・・」

「要らないものは、要らない!!」

「そうだよ、僕には兄さんと黒夜が居ればそれだけでいいんだよッ。他に、兄弟なんて・・・・・・・・要らないッ」

二人は各々に云いたいことだけを云ったら、自分の部屋に行ってしまった。

・・・・・・・・俺は、どうしたら、いいんだろ・・・・・・・・・・?

39話（前書き）

赤夜視点。

39話

要らない、要らない。

妹なんて、要らない。

僕にはあの二人だけで十分なんだ。

妹なんて、厄介なだけだ。

ああもう、母さん達は何を考えているんだか。妹！？ 今更だよ。

「何で・・・・・・・・・・」

あの二人・・・・・・・・・・

「性行為したのさ・・・・・・・・・・」

僕はハアと溜息をつく。

しかも、あの二人幾つよ。母さんは確かアラ・・・・・・・・云ったら殺されそう。父さんは母さんの二つ位上だし・・・・・・・・。。

「十分な年じゃん・・・・・・・・何で今更・・・・・・・・・・」

要らない。僕にはあの二人だけで十分。これ以上、護る者を・・・・・・・・大切なものを増やさないでほしい。

兄さん達でも、此の手に収まりきらないのに、何で・・・・・・・・増やすのさ・・・・・・・・。。。

此の手に、収まらなければ？ 何時^{いつ}、居なくなってしまうんだろ
う？

「僕は・・・・・・・・」

怖いんだ。これ以上、

大切な者を増やして、護りきれないのが。

これ以上、此の手に収まらなかったら・・・・・・・・

僕の方が、どうかなってしまう。

40話

何を考えてんだ、あの両親ふたりは……………。

部屋に戻った後、俺はずっとベッドのうえで不貞寝をしている。

二階に上がるときに見た、白夜の悲しそうな顔が、頭から離れない……………。

「あんな…………顔をさせるつもり、無かったのに……………」

自分が、あの兄に悲しそうな顔をしてしまったのが、悲しい。自己嫌悪、だな。

「あー、どうしよ……………」

合わせる顔が、無い。両親に、白夜に…………。

「つつらー」

手で顔を覆う。要らない意地を張り、白夜を悲しませた。こんなはずじゃ…………無かった。

俺は…………怖いだけなのに、大切なものを増やすのが…………。

もし？ 護りきれなければ・・・そのあと、俺はどうなる？

それを、手放してしまったら？ 見失ってしまったら？

俺は、壊れてしまう・・・ただせさえ、白夜も護りきれないのに・
・・・・。

俺は、壊れてしまう

絶対に

。

41話

翌朝、皆で集まって、家族会議をすることになった。皆神妙な面持ちで、俺は居た堪れなくなった。

長い沈黙を破ったのは、母さんだった。

「二人は、どうして要らないの？ 子供を」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

二人は答えることなく、俯く。どうにか、フォローをしたいけど、材料が見つからない。

すると、赤夜が口を開いた。

「僕は・・・・・・・・兄さんと、黒夜がいれば、いい。これ以上、家族が増えたら・・・・・・・・僕の護るべき対象が増えて、手に収まりきらない。だから・・・・・・・・」

それ以上は、喋らなかつた。

「そう、予想通りね・・・・・・・・。さて、黒夜は？」

母さんは黒夜にも答える様促す。

「・・・・・・・・俺は・・・・・・・・、赤夜兄と、一緒。俺は白夜を護るので精一杯。だから、もう、要らない・・・・・・・・」

俯きながら云う、黒夜の背中は酷く弱弱しく見えた。

「じゃ、白夜は？」

「ふへっ！！？ お、俺・・・・・・・・？」

驚いて母さんを見ると、母さんは至極真剣に俺を見つめている。

「俺は・・・・・・・・」

ちらりと、二人を見る。二人は俺がそんな返答をするのか、と俺を真っ直ぐに見ている。

「二人は．．．．．護れないことを、畏怖^{いふ}してるんだよね？」
それに、二人は頷く。

「じゃ、」
息を吸って、答える。

「俺が、護ればいいんだよ」

「ッ」

思ってもいなかった答えに、二人は驚き、母さんと父さんは眼を
瞠る。

「だって、そうでしょう？ 俺が、其の子を護ればいい。俺は、二
人に護られてるんだから」

「ッ」

二人は涙眼になつて、俺を見た。

「そして、出来る限り、俺も二人を護る。そうすれば、一件落着だ
よ」

にっこりと笑って云えば、母さん達は苦笑し、二人はとうとう泣
きだした。久しぶりに見た二人の涙。

「もつと、甘えて、いいんだよ．．．俺の大事な弟、赤夜、黒夜．．
．．．．．」

可愛い弟達を抱きしめて、俺は笑った。

42話

「くそ、まさか白夜の前で泣くとは……………」

「僕も。失態だよ」

「可愛くねー」

呟く弟達を見ながら俺は云う。

「「可愛くないとは失礼な」」

「じゃ、可愛いと思ってほしいの？」

「……………」

「ほら」

俺はくすつと笑いながら二人の頭を撫でる。

ああ、落ち着くな……………。

こうやって、二人と……………いつも通りに過ごせることが出来て、
本当によかった。

ニコニコと笑っていれば、二人はちよつと顔を顰めた。

「……………何(だよ・さ)……………」

「いやー、やっぱり、可愛い弟達だなー、と」

「お前に弟とか、思われたくねえよ!!」

「いきなりツンモード!? さっきまでのデレモードは!?!」

黒夜はきつと巷で有名なツンデレだ……………。厭だ、そんな
弟……………。

「俺はツンデレじゃねえ!!」

「兄さん。ツンデレよりか、ヤンデレだと思う」

「赤夜兄まで何を云い出すのさっ!」

「ふふっ」

赤夜サマ、その意味深な笑みは止めて……………。いやもう、

本気で。

「いつも通りの三人ね」

母さんが、云う。俺達は動きを止める。其処には、穏やかな笑みを浮かべた母さんと、父さんが居た。

「御免なさいね、さっきまでの事。ちゃんと先に三人に云っておくべきだったわね」

「そうだな、俺達だけで決めてしまったのは、ちょっとまずかったな」

父さんは母さんの肩を抱きながら云う。・・・・・・愛妻家め・・・・・・。

「さて、今日の晩御飯は、お好み焼きにしましょうか！」
母さんが云うと、俺達は顔を合わせて笑った。

いつも通りの、生活、日々。

それは、何よりも大切なもの

。

後書き

これにて、神楽家三人兄弟は連載を終了いたします。
これまでご愛読いただき、有難う御座います。

これは、私が小学校の時に考えたキャラで、中学にあがって、友人に見せたところ、「これ、小説にして！」と云われまして……。譲歩して短編にしたところ、「連載にして！」と云われまして……。結局連載する事に。

コメディは苦手なので、ちょっと心配でしたが、友人が面白いと云ってくれたので、ちょっと助かりました。

それでは、これで失礼します。

2011年 4月 24日

蓮華

永 拝

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8333o/>

神楽家三人兄弟。

2011年7月11日03時24分発行